



小児保健協会発足準備会について

—発起人の立場から—

稲 福 医 院

稲 福 盛 輝

戦後沖縄において、医療関係の団体が次々と設立されたが、その設立にあたっては戦後の間もない貧しい社会環境、医療体制の不備な状況の下で育ってきたので、それなりに多くの苦勞が伴ったようである。当協会の設立の経過には周囲のよき環境に恵まれたこともあってか、私個人は取りたてて苦勞談や思い出は少ない。しかし協会設立準備に際しその計画、立案等については、山本達人、知念正雄両先生が精力的に努力なされたお蔭で、設立までこぎつけたのである。

協会設立準備から発足までの経過をふり返ってみると、私が協会説立の準備の構想を思い立ったのは昭和46年で、その目的は、地域住民に密着し子供の心身の発育を総合的な観点に立って考え、そうして多くの各専門分野の会員が参加出来る組織の必要性を感じたからである。

丁度その頃船川幡夫東京大学教授から沖縄に小児保健協会設立の御要望があり、私も日本小児保健協会の主旨に替同し、ここに設立準備の決意を固めたのである。設立期日は最初日本復帰の年を記念として昭和47年を目標にしていたが、復帰の年で周囲の方々も忙しく、又私自身も日本民族衛生学会沖縄地方会の設立や若夏国体開催準備等で多忙な年であったので、翌年に見送ることにしたのである。

昭和48年2月20日に山本、知念両先生と私3人は、那覇市内の八汐荘で最初の協会設立準備の打合せの会合を持ったのである。その後3月17日、5月9日、5月26日と会合を重ねて漸く協会の主旨、名称、規約、発足時期等について

の草案が出来上ったのである。そうして6月21日に愈々協会設立準備発起人会を那覇市内のゆうな荘で発足する運びとなり、発起人は各界の代表者17人で構成された。

7月28日午後2時より那覇市内の若松ホールにおいて発足式及び総会が開催され、ここに沖縄県小児保健協会が正式に発足し、初代会長に故仲地吉雄先生が就任され、16人の理事が任命されたのである。総会后引続いて第1回沖縄小児保健学会が開催され、一般演題5題、発足記念講演は船川幡夫先生がなされ、協会は順調に発足したのである。

当協会の発足にあたっては、各方面から絶大な援助と指導によって今日のような発展をみたのであるが、その中でも特にその原動力となったのは、協会発足以来昭和57年まで最も困っていた事務局を置き、且つ側面から事務を指導助言して下さった県環境保健部予防課、乳児一般健診に際しては全面的に協力下さった日本小児科沖縄地方会、保健婦協会、沖縄県予防医学協会、市町村の衛生課等の方々である。それから発足当時より第2回を除いて第4回まで、総会及び学会開催の際に無償で会場を提供して下さった許田商会の方々に対し、感謝申し上げる次第である。

協会が発足して早や10年の歳月が流れ、その間に乳児一般健診の定着、社団法人への移行、日本小児保健学会開催等の事業も着々と充実発展してきたのである。又社会環境も急速にうつり変わり、之に伴って子供を取り巻く環境も複雑多様化してきたのである。従って協会の事業

も之に対応して子供の健康を考えなければならぬ時代を迎え、協会は常に子供達の立場に立って、彼等の代弁者として活動したければならないと思う。それには子供の健康を単に子供の一部の現象だけについて考えるのではなく、小児から成人に至る生涯の観点に立って一貫性の

ある対応をする必要性があると思われる。その為にはその地域の文化、生活習慣、民度等をふまえて事業を推進しなければならない。そうして日本の小児だけでなく、国際的な視野に立って小児保健活動が出来るような協会になりたいと念願する一人である。



創立時をふりかえって

環境保健部医務課

仲里 幸子

昭和48年3月の初旬、当時の予防課長宮城英雅先生より、小児科の稲福盛輝先生、山本達人先生、知念正雄先生が来訪されるので、同席するようにいわれ、三人の先生方のご要望、ご意見を承わったのが、小児保健協会との結びつきの始まりである。

沖縄の小児保健に対する情熱にみちあふれた先生方の姿に、私達は忙しさも忘れ、お手伝いすることになった。発起人会や総会の準備等、めまぐるしい日々が続き、時には母子保健担当の母子成人係の職員が業務以外の仕事を引き受けていることに対し、オーバーワークになったりしたが、沖縄の小児保健の向上のために我々がやらなければ、という意気込みが、退庁後も協会設立のために頑張る事が出来た。予算があつて協会が設立されたのではなく、予算がなく協会がスタートした為、すべてボランティアであった。時々、宮城英雅先生のポケットが大きな口を開いて、私共をねぎらつて下さったのが、なつかしく思われる。当時の母子成人係の職員は、真部智恵子（石川保健所主任保健婦）、大城幸進（薬務課血液係長）、比嘉恵子（県立那覇病院主事）で、立派な父親、母親となり、中堅公務員として活躍している。

母子衛生は種々の事業が多く、問題も多い上、

更に小児保健協会の育成をかかえていた為、時には予防課職員が「宮城課長は予防課の課長か、それとも母子衛生の課長か」といわれたが、しかし、現在の事務局に引越するまでは、歴代の課長（宮城英雅先生、大嶺経勝先生、小渡有明先生、砂川恵徹先生）をはじめ、母子衛生担当係、予防課職員が、全面的に協力をし援助をし指導をして下さった。現在の小児保健協会をみる時、裏方さんの役をして下さった予防課の存在は大きい。他県にあまり例のない事だと思ふ。本当にありがたいものである。

協会設立のため多くの方々は、発起人会や準備等、又、設立後の役員会等、参加者は手弁当であった。遠くは名護から参加した小渡先生達も、交通費の支給もなく、最終バスの時間がすぎると、タクシーを使用しておられたが、すべて自己負担で、現在のように交通費が支給されるようになったのは、まだ歴史が浅い。

小児保健協会の大きな事業として行なわれている「医療機関に委託して行なう乳児一般健康診査」は、当時、実施している他県の状況から、小児科専門医による健診を効果的に実施するために、小児科医、保健婦、看護婦、臨床検査技師、市町村職員、母子保健推進員等のチームで、土曜日の午後及び日曜日を利用して親が乳児と

一緒に参加出来るように各地域で実施する事になり、¹沖縄方式、といわれるようになり、現在も続いている。この事業の医師等の配置について、現在の体制が確立されたのは、琉大小児科の平山清武教授のお力が大きい。

協会スタート時は予算もなく、医師等の乳児健診の報酬費支払いも、母子成人係の真部さん、大城さん、比嘉さん達が、大城さんの車で各個人に支払いにまわり、²ガソリン代は？超過勤務手当は？、とかの質問もなく、グチ一つこぼす事なく、一生懸命にやってくれた事が、今も感謝の念で一ばいである。非常勤の事務局職員

が昭和48年7月より雇用されるようになり、宮城和子さん、伊千久美子さん、宮里園子さん、現在の棚原睦子さんと4代目の事務局職員が、小児保健協会の事務局を支えている。

役員会も年々充実し、協会の充実とともに昭和57年には役員及び会員が一致団結して、日本小児保健学会を、当県で成功させた事は私共に、和と希望と自信を与えてくれた。

協会の創立時と10周年を迎えるようになった協会を比較してみると、感無量である。これからの協会を、皆で考え、育てたいものである。

宮古地区乳幼児一斉健診について

宮古保健所

仲田 八重子

時代の流れと共に多様化する社会状況の中で公衆衛生状況もいろいろと変わり、昭和27年に宮古郡島に保健所が設立され公衆衛生の第一線機関として感染症を始め結核・寄生虫病・風土病・その他の疾病と対応策がとられ地域の健康を阻害する問題も改善されて参りました。

昭和47年には念願の祖国復帰がかなえられ、すべての面で本土の法律の適応を受けるようになり母子保健法も大きく変わり色々な業務が増え、県・市町村ともに新しい制度の中でおちつかない状況であった。

衛生統計の資料から国や県と管内を比較しても母子保健上のたちおくれが目立ちその整備と強化が必至とされた。特に当地域の母子保健上の問題については、公衆衛生看護活動の面からも保健婦なりの視点をあて検討を加えてきましたが、地理的条件・経済的・社会的要因・これまで培われてきた生活習慣・医療機関の不整備等も加わって格差が考えられた。

専門医や医療機関の少ない離島地域では保健法が制定されても活用し恩典を受ける事も出来ず宿命的なダメージを受けている矢先、東京大学医学部母子保健学教室平山宗宏教授や県予防課長（宮城英雅先生）の御尽力により、県と国との話がまとまり本土復帰に伴う特別対策事業の一環として宮古地区乳幼児一斉健診が実施されるはこびとなった。

母子台帳（妊娠届出と出生届出が記入出来る様式）を作成し対象者の把握をすると共に、母子健康相談票（妊娠中の管理から乳幼児期までの記録が記入できる様式）を考案し、諸準備をすすめた。

昭和49年7月東京大学、国立公衆衛生院、岡山大学、沖縄県小児保健協会と総勢20人の健診班を迎え宮古全地域の3才以下の乳幼児2,855人を対象に92.8%の実施をおさめた。

初めて接する先生方に市町村も保健婦も不安と緊張の一週間であった。併し団長の平山先生

を初め先生方の表情はいつもエビス様のような温厚な奮意気で私達の緊張感をほぐしてくれた。暗中模索の中で無事全地域を終える事が出来た。健診後の反省の中から母子手帳交付と時期の問題、離乳期と離乳食の問題、体重増加や疾病等の問題について貴重な指導助言を載いた。

昭和50年は、12月の冬期に実施したため風邪等の流行もあって受診率も低下した(76.5%)。対象者の受診し易い季節を考慮に入れ、又先生方の都合等も加味して7月の夏休み時期が選ばれた以後は夏の乳幼児一斉健診として地域の子を持つ親からも親しまれ待たれるようになった。

回数を重ね一つ一つの問題がうきぼりにされ解決策がとられるようになった。母親の育児に対する関心も高まり疾病面だけでなく躰の面や心理的な面まで質問するようになり健診班への信頼感も深まり、どちらの会場でも和気藹々とした健診風景がみられます。健康を阻害する問題の解決策はある程度確立されてきましたが専門医や医療機関の整備が未だ充分ではないため先天異常児や療育を必要とする児たちへのアプローチが問題となった。療育や訓練のため沖縄本島まで出かけるのは経済的にも精神的にもかなりの負担がかかる。

幸い沖縄整肢療護園中部分園長落合靖男先生の御尽力により療育相談が宮古地区で受けられるような対策がとられ、昭和57年より隔月ごとに機能訓練・言語訓練・保育・診察とそれぞれの専門スタッフでチームを構成し療育相談が開

設できるようになった。毎月30人~40人の障害を持つ子供たちがこの健診と訓練の場でもよるこんで参加しています。心身障害児育成会も結成され、日曜保育・ピクニックと相互の親睦を深める機会も実現できるようになった。

最後にここ数年来指摘を受けておりますむし歯の問題がありますが昨年の健診から歯科医師も派遣され健診結果による貴重なデータから、今後の歯科分野に対する指導のあり方が図れるようになった。

今年で10年目の節目になります。私達保健婦にとって10年1日の如しで年中行事の楽しくせわしい時期として待たれるようになった。地域の母親達の意識の向上や市町村のこの事業に対する理解と協力も大きくかわりました。とりわけ私達保健婦にとって健診期間を通して得た先生方との交流は保健婦業務の質的向上はもとより日頃研修の機会に恵まれない離島保健婦にとって、あらゆる面で刺激となり自信をもって業務がすすめられるようになった。医療設備の充実は逐次改善されてきたとはいえ未だ1人立ちできない離島苦の悲哀を痛感しています。併し10年間も温かく育て下さった先生方の御温情に報いるためにも今後尚一層の研賛をつみ地域に還元したいと願っています。

最後に長期間にわたりあらゆる面で御配慮下さった健診班の先生方・国や県・沖縄県小児保健協会・御協力載いた医療機関へ深く感謝申し上げます。

先島地区乳幼児一斉健診について

— 八重山の場合 —

八重山保健所 唐 真 佑 子

昭和51年も半ば、那覇より転勤してきて八重山保健所の業務にもまだ慣れない頃だったと記

憶している。保健婦会議で乳幼児一斉健診が議題になり、広報・場所、健診の流れ等について

話し合う。乳幼児一斉健診？、一斉健診？と耳新しい事業に戸惑い、一斉健診とは何ものぞと理解するのに時間がかかった。

母子総合健診と称して年1回、7月（時には8月）に1週間の日程で保健所の通常業務を中止して、東大母子保健教室を中心に、県小児保健協会派遣の医師、市町職員母子保健推進員等のメンバーで石垣市は0～3才児、離島は0～5才児と妊産婦を対象に健診するのである。

その健診の始まった経緯は、多くの離島を抱え、小児科医の少ない当八重山地区で医療機関

に委託して行なう乳児一般健診制度は活用できず、又、保健所でも保健婦による乳幼児相談だけで全地区小児医による検診の対応はきわめて困難な実情の中で、昭和49年9月厚生省の派遣師、県小児保健協会等の協力で第1回の健診が実施された。第3回目の51年度より心理相談員の参加もあり、発達診断心理相談も行なわれるようになった。又、昭和55年度より発達健診の試み、昭和57年度より歯科医も加わり、更に充実してきた。

過去5年間の受診状況は下表の通りである。

市町名 年度	石 垣 市									竹 富 町			与 那 国 町			合 計			乳 児 一 般 健 診						
	対象数			受診数			受診率			対象数			受診数			受診率			受 診		検 血			有 所 見	
	人	人	%	人	人	%	人	人	%	人	人	%	人	人	%	人	人	%	数	率	数	貧血数	貧血率	数	率
53	2,538	2,236	84.7	269	263	97.7	249	253	101.6	3,156	2,752	87.2	720	90.8	700	68	9.7	182	25.3						
54	2,699	2,369	87.8	278	260	93.5	245	200	81.6	3,222	2,829	87.8	734	97.1	722	83	11.5	221	30.1						
55	3,111	2,819	90.6	279	273	97.8	238	209	87.8	3,628	3,301	91.0	776	109.0	714	119	16.7	225	29.0						
56	3,395	2,730	80.4	293	279	95.2	236	231	97.9	3,924	3,240	82.6	763	87.3	750	19	2.5	214	28.0						
57	3,316	2,844	85.8	295	296	100	246	216	87.9	3,857	3,356	87.0	896	96.3	873	11	1.3	178	19.9						

※ 貧血者は53～55年度はHb 9.9g /dl ↓ 56～57年は8.9g /dl ↓

昭和56年度は303mmの豪雨、強風下で82.6%の受診率となったが平均して87%と地域にも浸透してきた。

八重山においては、この健診を基盤に乳幼児の健康管理をしていると言っても過言ではない。心疾患児管理が確立し、昭和51年より県立中部病院・八重山病院の協力で年2回、精査及び経観を実施し、心疾患児への生活指導、学校への働きかけ、中部病院での精査や手術、事後指導へとつながっていく。

更に、障害児のフォローアップもできてきた。健診での発達段階に応じたしつけ方、遊び、集団保育のすすめ等の具体的アドバイスは、母親の強い励ましとなり、発達健診の場は同じ悩み

を持つ親同志の話し合いの場ともなっている。更に、保母の積極的な参加があり、保育所における健康管理や障害児への関心が高くなった事が伺える。又、健診後、医師、心理相談員、保健婦でケースカンファレンスをもち、ケースに具体的支援をする為に保健婦はアドバイスを得るとともに、障害児に対する研修の場ともなっている。

発達健診等における障害児の集団保育の強調が親等の力となり、市の障害児保育の実現につながった。昭和57年5月、障害児の受け皿となる医療機関の有機的なつながりとして沖縄本島より専門者を招聘するための組織づくりに保健婦は参加し、昭和57年7月より、隔月毎の第3

土曜日に療育相談（診察・機能訓練・言語訓練・保育等）を実施する事ができた。更に、昭和58年3月より保育効果をあげる為に、母親中心の土曜保育を月に2回、保母・保健婦の協力で実現している。一方、健診期間に、健診班の先生方を講師に、保母市町の職員、保健婦への講演会、障害児の親との懇談会、事例検討会等教

育の機会ともなっている。年々、医療事情は改善され、乳幼児の健康管理も充実しつつあるとは言え、全地区総合健診の継続、発展は重要な事業のひとつと考える。過去9年間の健診実施に対して感謝し、今後とも一斉健診が継続実施できるよう関係者の特別なお取計いを切望する。



小児保健協会設立当初の頃

宮城小児科医院

宮城 英 雅

昭和48年の年も改たまった頃であつたらうか、仲里幸子女史（当時母子成人係長）から、知念正雄先生が、小児保健協会設立について構想を有っておられ、有志の方々と話したい意向であるとの相談をうけた。

昭和47年5月15日に日本復帰が実現して未だ1年を経っていない時期で、予防課長としての自分の掌握すべきことも、不十分で、不慣れな時期であつた。

知念先生にお会いして解つたのだが、この話しの火つけ役は船川幡夫教授であつたようだ。10年後、日本小児保健学会を沖縄で催した際の懇親会の席上で、私は船川先生のことを「仕掛人」とご紹介申し上げた。

早速有志が集り、準備作業に手がつけられた。規約、組織、役員、事業、会計などについて数回、検討され、昭和48年7月28日に総会を開くまでに至つたのである。

初代会長には仲地吉雄先生が選ばれた。もともと民間団体であるので、民間人（公務員と対比して）から会長を出すという意見の一致があつた。

又、研究発表については、その機会の少ないパラメディカルの方々を優先し、医師達は、一

歩譲るようにとの申し合わせもあつた。

その年は時あたかも乳児健康一般診査が行われた初年度であつた。この制度と沖縄県小児保健協会の役割を見逃す筈がなかつた。

発案者の仲里女史と共に仲地会長の意向を打診し、理事会に諮り、小児科医会、保健所、市町村との調整を済ませ実施するようになったのである。当初から協力団体としての沖縄県予防医学協会の存在を忘れてはならない。

即ち、県は、小児保健協会に、この事業を依頼したのである。

健診開始当初は、弁当のことや、リネン類の件、その洗濯はどこがやるか、クーラーの電気料のことまで問題がとび出し、その度に理事会は公正な態度でこれらの解決に當つてきて、現在的方式が固定してきたのである。

弁当は市町村に発注を願い、協会が費用を支払い、設営は市町村、診察用器具備品が協会配布し、市町村若しくは保健所が保管、健診当日の責任者が保健婦、事業に参加する者の万々に備えて、保険の加入、身体計測の追加、それに付随するマンパワーに対する費用の協会負担、予防医学協会に対する消耗品備品の調整、参加医師の配置に関する理事の仕事の分担など、10

年かかって、ここまでやってきたのである。

乳児一般健康診査も、多少の目安はついたが、未だ本島内に限られていた。昭和48年お仕事を来沖された平山教授に、宮古保健所管内の新生児死亡率が極端に低いことに対して、統計調査部と共同で実態調査を行った（全県的に）が、これをもとに、更に調査をすべく計画中である旨お話ししたら、宮古島の全乳幼児を対象にした健診の構想が生れてきた。（宮古保健所管内だけの妊婦追跡調査は昭和49年1月1日から12月30日まで。）

マンパワーは平山教授、予算は県庁、実施は宮古保健所及び各市町村という分担であった。

実施時期まで余裕がなかったが、フル回転で調整し、48年の夏、第1回宮古保健所管内乳幼児健診が実施された。現在の陣容と仕事内容は質的には当時と変わったが、大略、当時のまま継続されている。翌年49年にはこの健診方法は八重山保健所にも適用され、以来10年間も続いて

いるのである。

一方本島周辺の離島に対しても、乳幼児健診が、50年頃から始められた。

当初は半官半民的事業推進であったが、財力と人的資源が解決されるや、本事業の為に、わざわざ離島へ出向いて行くようになったのである。

精密検査を要するものは、琉大始め、県立病院へ紹介できるパイプもきちんと繋がった。

今や、乳児一般健康診査は安定した水平飛行の状態に至った。

本県の健診方法は、沖縄方式と称され、全国でも稀に見る立派な事業となっている。

ここまで至ったのは、東大の先生方をはじめ、本土より毎年お出でになる先生方の情熱や、保健所の職員の理解及び市町村職員の意欲などのお蔭と感謝する次第です。

最後に沖縄県の次代をになう子らの健やかな成長を祈りつつ筆を置きます。



発足当時をかえりみて

石川保健所
眞部 知恵子

印刷のインクの匂いもま新しい「沖縄の小児保健」第10号が、今しがた手元に届きました。子どもたちの限りない可能性の康やかな伸びと、健全な社会の発展をテーマにしたシンボルマークの優しさをながめてみると、ここまで発展してきた協会に、10年の歳月の重みと、手の届かないほどに成長した息子によせる母親の心境にも以た思いを抱きます。

◀ 設立準備の頃

復帰後の混乱期の真只中にあった昭和48年、当時、中部病院小児科医長であられた現小児保健協会長の知念先生、前会長の稲福先生、それ

に山本先生を中心になって、設立に向けて準備が進められていきました。小児保健協会の設立は、県の関係事業の推進に密接なつながりを有することから、事務局を当分の間、県厚生部予防課母子衛生係に置くことになり、4月に配置換えになったばかりの私も当然かわりを持つことになったわけです。これまで、駐在保健婦として現場にいた私が、突然、行政の中に置かれ、これまでと全く異った仕事することになり、ただただ係長の言いつけによってしか行動できない毎日でした。その上、大事な協会設立の為の事務を担当させられ、頭の中はパニック

状態が続いていましたが、へびにおじないめくらの如く、言いつけられるままに仕事したものでした。

◀ 記念講演のテープを文字に

いよいよ設立の運びとなり、昭和48年7月28日、協会設立に御勸力下さいました船川幡夫先生をお招きして設立総会が開催され、船川先生には記念講演をしていただくことになりました。先生の記念講演は、沖縄の小児保健創刊号に掲載することになり、テープから聞き取って文字にしていく作業は、初めての私にとって至難の業でした。当時は、今のようなワンタッチのカセットテープはまだまだ普及しておらず、あのリール式の大きなレコーダーを利用した録音でしたから大変でした。女性一人の力ではかかえきれないほどの重さのレコーダーを家へ運び込み、ガチャガチャ廻しては止め、止めては廻し、巻きもどしたり進めたりと、その度に「ガチャン、ガチャン」と大きな音を出すので、家族に気がねしながら、幾夜も幾夜も同じ作業が続きました。創刊号が発行され、活字を見た時には、涙の出る思いがしたものです。創刊号は私の最も大切な一冊として大事に保管してあります。

◀ 乳児一般健康診査の実施へ

昭和48年度厚生省から補助対象の新事業として、「医療機関に委託して行う乳児一般健康診査」の通知が出された。生後3ヵ月～1才未満の乳児を対象に、乳児健診が、公費で受けられるという、喜ばしい制度ができたわけですが、当時の沖縄県の医療事情は極めて悪く、特に小児科を標榜している医療機関は一握りほどにすぎませんでした。おまけにその60～70%が都市に集中していることもあって、連日患者は一ぱいで、とても健康な赤ちゃんの健診が出来るような状態ではありませんでした。かえって健診を受けに行ったばかりに病院から感染症をもらって帰るようなことになりかねない状況でしたから、直接の担当者である仲里母子衛生係長は頭を痛

めている毎日でした。そんな時機良く小児保健協会が設立し、機転の早い宮城英雄予防課長と、仲里母子衛生係長は、早速、独特なアイデアで、小児保健協会へこの事業の委託を考えたわけです。協会役員会や理事会で十分に検討を加えた後、その申し出を受諾することが決定し、今日の小児保健協会を築き上げる原動力となった乳児一般健康診査が、沖縄独自の方法で開始されたわけです。

◀ 夜間の報償費の発達

県より委託を受けた乳児一般健康診査は、土曜の午後と日曜日を利用して実施され、スタッフは、医師、試験検査技師、看護婦、保健婦、市町村職員のチームで編成された。事務局は、それらのスタッフへの報償費の支払いもしなければならぬため、通常勤務を終えた時間外に、遠く具志川あたりまで、報償費の支払いに出かけました。当時、同係の大城幸進さん（現在業務課）に運転をお願いして、先生方のお宅をたずね歩き、大金「？」の入った袋をかへて必死でした。車の中で、大城さんが、「今、車が事故を起して、僕と一緒に死んだらどうする？」と唐突な質問をしてきましたが、「何があっても今は死ねない」などと冗談とも本気とも言える会話をかわしながら夜の58号線を走り続けたものでした。

あれから10年、まるで昨日のこのようにはっきりと思い出すことができますが、その間、何といろいろなことがあったことでしょう。今でも全く残念で信じきれないことは、2度目の会長の席にあられた仲地吉雄先生のあまりにも急なご逝去でした。ここまで成長した小児保健協力を、きつとかげながら喜こんでおられることと思います。初代、4代、と会長を務められ、当協会をこよなく愛された仲地吉雄先生のごめい福をお祈りするとともに、10才になった小児保健協会のすばらしい発展を心からお祝い申し上げます。

昭和58年5月



沖縄県小児保健協会 10周年に寄せて

沖縄県立那覇看護学校

許田英子

よく「10年ひと昔」といわれますが、昭和48年7月に小児保健協会の設立総会が若松ホールでもたれてから、はや10年、時の流れの速さに驚くと同時に、協会の急速な発展ぶりに感動の涙をおさえることができない気持ちでいっぱいです。心より創立10周年をお祝いしたいと思います。

10周年というこの意義ある年を節目とし、私自身、何か心に残しておきたいとペンを取ったにもかかわらず、思うように筆が進まず、久しぶりに協会設立当時の創刊号を開いてみました。初代会長の故仲地先生、発起人代表の稲福先生の御挨拶、また、知念先生の設立の趣旨と経過を読んでいると、数々の事が走馬灯のようによみがえってまいります。たゆまぬ努力と意気盛んな心ざしに、当時、協会設立に御参加なさった諸先生方に心から敬意を表したいと思います。

私も設立当初から会員の一人として、協会の事業に参加し、毎年行なわれる学会や研修会を通して、小児保健に関する知識の研鑽を積み、看護教育や助産婦の研修等において、微力ながら普及に努めてまいりました。

最近の医療は専門分化が著しく、ともすれば閉鎖的で「井の中のかわず」になりがちではありますが、当協会においては種々の専門家が一同に会し、小児保健という大きな目標に向って各々の立場から意見の交換ができることは、画期的なことだと思っています。

そのような中で、特に思い出として忘れることのできないのは、昨年那覇市で開催された「第29回日本小児保健学会」です。全国一の演題応募があったことは勿論、すべての日程がスムーズに運営できたことは何よりも嬉しいことで、

会長を中心とした当協会役員と会員の一人一人が真剣に学会の成功に向けて一致協力した結果であったことと思います。その気持が続く限り当協会もますます発展していくものと信じております。学会の成果は会員一人一人の気持を新たにさせ、その後の母子保健研修会や去った4月の総会における熱気溢れる会場風景となって現われました。

次代をになう子どものすこやかな成長発育を願わない者はいないと思います。この10周年を契機として、小児保健に関わる各専門家が各々の知識と技術を活用し、さらに連携を密にして、総合的な小児保健の展開ができれば、どんなに素晴らしいことでしょう。医師をはじめ、保健婦、助産婦、看護婦さらに栄養士、保母、養護教諭が年に一度、同じ目標に向って情報交換をすることは、お互いの業務を効果的に進めることができるものと思います。

当協会が今年の10周年を契機に専門職団体として、よりいっそう発展を続け、願わくば次代をになう子ども達の健全育成のために、社会的活動の中軸にまで発展されることを祈っています。そして、次の20周年までには、何時、誰でも、気軽に子どもの健全育成に関わる相談ができるように、指導センターとしての会館建設を心から願うものです。

周産期を中心に業務を行なう私ども助産婦は、母子保健の出発点に関わる者として、よりいっそう努力し、小児保健チームの一員として、子どもの幸せのため、その責務を果していきたいと思います。

最後に、今後の小児保健協会の限りない発展のため、少しでもお役に立てれば幸いです。



沖縄県の小児保健活動を通じて思うこと

沖縄県立南部病院小児科
大宜見 義 夫

沖縄県小児保健協会創立10周年迎え、およろこび申し上げます。離島僻地が多く、交通の便のわるい沖縄県で、全県くまなく乳幼児健診が行われ、しかもそれが組織的計画的にスムーズに実施されていることは、当協会の成果だと思えます。また、昨年は、第29回日本小児保健学会の開催地として無事大任を果たしたことは、会長の陣頭指揮のもとに一致協力した会員相互の努力のたまものと思えます。沖縄県小児保健協会のここ10年の発展の歩みは、当協会の設立に苦勞された先輩の先生方にとりましては、感無量のものがありましょう。

私は、54年秋北海道から転勤し、途中から入会した新米ですので、ここでは乳幼児健診を通じてみた沖縄の子どもらの感想や特徴を、北海道の子らと比較して述べてみたいと思います。

沖縄の乳幼児健診で私が驚いたのは、ひとり歩きの時期がとても早いことでした。早い子は生後7～8ヶ月から歩き出し、1才頃までにはたいていの子が歩けます。北海道では1才すぎから歩き出すのが普通です。その違いのひとつは、体の大きさと関係しているだろうと思えます。北海道の子はまんまるに太った子が多く、沖縄ではやせ型のスマートな子が多い。乳児の体形からいっても、北海道は関取りの産地であり、沖縄はボクサーの供給地といえそうです。沖縄で股関節脱臼が少なくみえるのも、大腿の動きを制限するおむつや着衣の数が少ないためではないでしょうか。あつい沖縄ではあせもや虫さされをよくみえますが、寒い北海道では汗をかかない代りにおしっこの量が多く、おむつか

ぶれをよく見かけます。また寒いため、切れ痔による便秘も多いようです。乳幼児健診にくる母親の恰好も北海道ではおんぶ姿が一般的ですが、暑い沖縄ではめったに見かけないのも、北と南のお国柄を反映しています。

沖縄の乳幼児健診では、子どもの数の多いことにもびっくりしました。久米島の健診に行った時は、ハナをたらし、泣きわめく子ら6～7人をつれて汗だくになっている昔ながらの母親たちを見た時、何だかほっとしました。物が豊富になり、生活が楽になる文明社会になると、子どもの数がへるといわれます。何もかも便利で楽になってゆく中で、子どもだけが手がかかり、時間も金もかかる厄介な存在として残るからです。核家族化の進む中で子どもに老後を託することもできなくなったし、きらびやかな消費文化の中でおむつの洗濯にあけくれる母親のイメージはスマートさを欠くし、親自身もっと自由に人生を謳歌したい気持から、子どもを足手まとい視する風潮が生まれます。

消極的な形であれ、子どもの存在が拒否される文明社会にあって、沖縄が出生率全国一を保っていることに心強さをおぼえます。年々子どもの数がへってゆく中であって、子育ての意味や親子関係のあり方を、健診や育児指導を通じて伝達普及させてゆくことも、10年目を迎えた沖縄県小児保健協会の今後の課題ではないでしょうか。

会員相互の理解と協力で当協会のますますの発展を祈ります。



つれづれなるままに筆をとれば

沖縄県立コザ看護学校

古 謝 フミ子

創立10周年記念によせて執筆の依頼を受けまして私の身のあまる光栄でございます。

看護職の中の一人として理事に選出されまして6年の歳月が経過致しました。その間、喜びや悲しみを味わう数々の思い出があります。毎月1回夜7時半から開催されます理事会は、専門医の先生方や看護職のメンバーで構成され平均年齢45歳位です。

30代後半の若々しい知念正雄先生を会長に民主的な会の運営がなされ、男性の多い大人の集まりのなごやかな雰囲気の中に閉会となるのが夜の10時頃です。那覇と具志川を往復する会議出席は、疲れを覚えることもありましたが、私の職場に近い所で開業しておられる会長の知念先生や中部病院の安次嶺先生方が、お忙しい診療業務のかたわら本協会のために、情熱を傾注しておられるお姿を思います時に、私はあまりお役に立てない理事だが参加することに意義があるという楽な気持で出席致しました。

本協会は、年々会員数も増加し、発展的な組織活動をしております。昭和56年3月に社団法人沖縄県小児保健協会として設立し人格をもつ職能団体として会員の資質向上は勿論、県民の健康福祉の向上に寄与されていることは関係者から高く評価されております。開業医の先生方

は、昼夜の診療業務のかたわら島内の健診業務に積極的に参加し又離島健診にも出掛けられております。これこそ世界がめざすプライマリヘルスケアの実践活動と思います。

昭和57年は、日本小児保健協会総会並びに学会を本協会が担当しまして成功裡に終ることが出来ました。これもひとえに会長の知念正雄先生をはじめ、各理事の諸先生方、事務局の棚原さん、関係団体のご協力や日頃のチームワークの良さ、計画的に細かい準備をすすめたことが、実を結んだものと理事の一人としてよろこびを共にする者でございます。よちよち歩きの乳児期から10歳の学童期を迎えました1983年は、成長期の竹の子の節目のように大変意義深い10周年の祝福する年と存じます。

数々の思い出の中から多くのことについて学ぶことができました。本協会が、歩んでこられた道を、私達看護協会沖縄県支部は、去年の組織統合を機会に一步一步組織の基礎づくりや、役割機能を拡大し、県民のニーズに対応できる職能団体としての任務を果たそうとしているのでございますので、今後とも多に参加させて頂きます。

最後に本協会のますますのご発展を祈念しまして筆をおきます。